

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：37301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23560757

研究課題名(和文) 禁教時代のキリシタン集落形成に関する研究

研究課題名(英文) Study about Christian colony-forming in the Christianity ban age

研究代表者

村田 明久 (Murata, Akihisa)

長崎総合科学大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：40113253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：文久2年(1862)の外海地区佐賀領飛地絵図の内容を参考にして、現地で照合することにより、キリシタン禁教時代における少ない家屋数・小墓地・血縁による単位集落構造、及び、明治以降の集落の継続方向とカトリック集落方向の分化過程について明らかにした。また集落に点在する多数の石積み民家を調べることで、近世のネリベイ形式から近代のド・ロ壁形式へ、石積み民家の建築技術が変遷したことを明らかにした。このことで、江戸期にキリシタン集落が存在したことを物的構成から裏付け、石積み集落の文化的景観の顕在化に役立てた。

研究成果の概要(英文)：I made it clear about the unit village structure by the little number of houses, the small graveyard and the blood relative in the Christianity ban age and the differentiation process of the continuation direction in a village and the Catholic village direction after Meiji by consulting the contents of Saga territory enclave map of Sotome in 1862 and checking at the site. In addition, I made it clear that construction technique in a stone-piling private house changed from the Neribe style of the modernized world into the modern Dorokabe-style by checking a lot of stone-piling houses with which a village is dotted again. I supported that a Christian village existed in this for Edo period from material constitution and made use for the exteriorization of the cultural scene of the piling-stones village.

研究分野：都市史、都市計画

キーワード：都市計画・建築計画 民俗学 文化的景観 キリシタン集落 禁教令 墓地 石積み建造物 外海

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景では、キリシタン集落研究については習俗的研究が支配的で、地域研究の分野では明治以降の教会建築が主なものである。出自が不明な石積み建築、野石墓や集落への視点はほとんどなく、近代以前のキリシタン集落の実態解明に関する研究、とりわけ禁教時代については国内外の史料が限られ未知の領域であった。

(2) 石積み建築では、明治12年(1879)出津に赴任したド・ロ神父による旧救助院や旧鰯網工場(ド・ロ神父記念館)の建築が知られていて、「ド・ロ壁」といわれていた。一方、地域には「ネリベイ」といわれて同様な石積み民家が点在していた。これらはド・ロ神父が広めたとも否ともいわれ、定説がなかった。

(3) 研究対象の長崎県外海地区は、辺境地で近世期の潜伏キリシタンの地と伝えられるが、例えば文化財保護法による文化的景観地域の設定に際し、対象物の特定が困難なうえ史実と現在の集落地域との関係が定かではなく評価できないでいた。今回、詳細な文久2年の『西彼杵郡三重村賤津村黒崎村永田村図』(長崎歴史文化博物館収蔵、『文久2年絵図』と略す)を発見したことで、現地との照合ができ、幕末期の遺構を確定できるようにすれば、禁教時代の集落形成を特徴づけられると予想した。

2. 研究の目的

(1) 『文久2年絵図』に描かれた集落と現在の集落を照合することで、家屋・道・墓地・石垣・土地利用などの遺構および環境要素を確定し、禁教時代の集落構成を特徴づけ、さらに明治期における変化を把握する。

(2) 集落各所に点在する石積み建築を調査することで、分布と形態、石積み技術、建築空間の特徴をまとめ、石積み文化の形成とキリシタン集落との関係を把握する。

3. 研究の方法

(1) 『文久2年絵図』は、大村領の中の佐賀領飛地を表した1/1800の高精度な測量図で、家屋、墓地、道、石垣、土地利用の記載がある。『文久2年絵図』と地形図の照合作業は、地籍図レベルの重ね合わせを行うことで、合せ図を作成し、この図を元に『文久2年絵図』の記載事項について現地調査を行い、当時の状況の把握に役立てた。

(2) 『明治期字図』に記載された当時の字別の地籍図、所有者名、地籍、地種を用いて、明治期の集落の分析に役立てた。

(3) 外海地区等に点在する石積み建築調査を平成20年に行い、その分布、種類、構造、階数、ネリベイ高さ、屋根形態、屋根材料、空間型、構法について記録し、組積造建築の特徴や地域現象の考察に役立てた。

4. 研究成果

(1) 佐賀領の『文久2年絵図』に描かれた内容をみると、全体で家屋は407件、墓地は66件で、家屋数に比して墓地数が著しく多い。1墓地数当りの家屋数は6.17戸であった。隣接する大村領の墓地と比べると、著しく小規模で、共同墓地の体をなしているとは思えない。こうした少ない家屋数で小墓地を擁する集落形態を単位集落と名付けて、この集まりについてさらに追究した。

(2) 文久2年当時の家屋群のまとまりの要因について考察した。試行錯誤の末、墓地と集落を関係づける所有者名や墓碑銘の名字に着目し、年代の古い『明治期字図』の記録と対照させたところ、全家屋数407件のうち同じ名字の3件以上の集まりを形成した家屋群が196件と半数近くをしめた。3件以上の集まりは38集団になり、1集団当たり平均すると約5戸の集まりとなった。このように同じ名字の家屋群が同姓集団としてまとまり、これらが連担して集落を形成した。つまり、少ない家屋数・小墓地・血縁の集まりの家屋群を元に単位集落が形成されたことがわかった。これは禁教時代において、五人組制度、

檀家制度のもとで抑圧され、次第に形成されたキリシタン集落の形態だと考えられる。

(3)同様な分析で、1件しかない名字の件数が44件あった。平均より割合が低いのは下黒崎、逆に平均より高いのは出津、永田であった。高い字は、小田平、三五ノ谷、清水、高平で、明治になり出津教会ができ付近に移住や施設建設の変化が起こった地域である。1件の割合が高い地域では流動化が進み、禁教時代の同姓集団は徐々に解消したとみられるが、2006年ゼンリン地図の検討ではこのような同姓集団の現象はほとんど解消してしまっていた。

(4)『明治期字図』の記録と墓碑銘から、同姓集団と墓地との接近性をみると、下黒崎では約8割の高い接近性がみられた。一方、西出津では明治期のカトリック墓地共同化の影響で近くに墓地所有や墓碑がなく、出津北部で高かった。このように、禁教時代の文久2年以前は同姓集団に近接して墓地が設けられたことが資料的に裏付けられた。

(5)大村藩領では、牧野・尾崎の宝暦12年(1762)の立墓が最古であったが、佐賀領では、木場山手、河内谷の文久2年(1862)の立墓(自然石)が最古で、これより古い記録はなかった。古い墓碑がないことは不自然なので、立墓以外に残存する伏墓の中に、文久2年より古い墓石があるとみてさしつかえないであろう。

『文久2年絵図』の墓地66カ所について現地調査を実施した結果、現存39カ所、現存せず15カ所、近づけない等の未確認が12カ所であった。現存39カ所のうち、31カ所もの割合で伏墓形式の墓石が存在した。

このようなことから、文久2年以前は、大村領が立墓の墓地景観であったのに対し、佐賀領飛地では伏墓のみの墓地景観を呈していたことはまず間違いがない。

(6)『文久2年絵図』の墓地の立地をみると、辻道型、屋敷型、畑地型、林地型、海崖型の

型が確認でき、林地、辻道、畑地での墓地形成が約9割をしめた。集落形成よりみて、辻道型が最初の形態で、後に山手周辺を開拓して林地、畑地に墓地を形成したと考えられる。

(7)平成20年の石積み建築調査の結果、外海地区では総数232棟、その内訳は上・下黒崎町6棟、西・東出津町70棟、赤首・上・下大野町27棟、新牧野町64棟、神浦町65棟で、神浦から牧野、出津にかけて多く分布していた。地区外調査では、神浦北部の大瀬戸町雪浦でも多く分布し、さらに西彼杵半島全域でみるとネリベイ建築の分布は結晶片岩地層帯と一致した。調査建物のうち、牧野のN宅主屋、西出津のS宅主屋は主屋のネリベイ建築で、明治初年から幕末(ド・口神父赴任以前)の建築とみられること、また赴任地外の神浦、雪浦にも多数存在することから、石積み建築が全てド・口神父の影響とする説は無理がある。「ネリベイ」は江戸期に存在していて、「ド・口壁」と異なる流れととらえたほうが自然に考えられた。

石積み建築調査から、石積み塀を立て角を組む1面、2面、2面1角、3面2角、4面3角、4面4角の種類のネリベイ建築技術が確認できた。石積み建築の技術的変遷を検討すると、草屋根単体の口の字型・コの字型 周囲に拡大した草屋根下屋型 瓦屋根への改修型 ド・口神父の高壁型への展開がみられた。

(8)江戸期の「ネリベイ」について文献記述がある。ネリベイは、「明治初年頃までは住家は概して練塀を以て造作し」「瓦葺屋根はほとんど無く」「住家は概ね粗製にして且つ狭小なるを常とせり」とある()。さらに黒崎地方の秘書「天地始之事」に「合石の家に住家を致せ、必ず不思議あるべし」の一節があり、「合(お)う石(じゃく)」すなわち「温石(おんじゃく)」の転と解することができる()。また近世中期より後期・幕末にかけて西彼杵半島で牛が増加して

いて、畜牛が盛んであったとある（ ）。
畜舎のネリベイ建築は、平成 20 年調査では 2 件、平成 8 年調査で 14 件、北部の大瀬戸町でも確認している、江戸期のネリベイ建築の利用の一端がうかがえる。まだ推測の域を出ないが、江戸期の「ネリベイ」は神浦を中心とした分布が考えられ、外海のキリシタン中心地との関係も無視できないであろう。

< 引用文献 >

黒崎尋常小学校編、西彼杵郡黒崎村郷土史、1918

田北耕也、昭和時代の潜伏キリシタン、国書刊行会、1978、pp.96-99

大村市史上巻、臨川書店、1974、pp.355-356

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

村田明久、文久 2 年絵図『西彼杵郡三重村賤津村黒崎村永田村図』からみたキリシタン集落の地域特性について、長崎総合科学大学紀要、査読有、第 53 巻、2013、pp.9-15

[学会発表](計 5 件)

村田明久、キリシタン集落形成における同姓集団の影響について、日本建築学会九州支部、2015.3.1、熊本県立大学(熊本県熊本市)

村田明久、家屋と墓地の関係性によるキリシタン集落形成の分析、日本建築学会、2014.9.14、神戸大学(兵庫県神戸市)

村田明久、絵図を用いたキリシタン集落形成の分析、日本建築学会九州支部、2014.3.2、佐賀大学(佐賀県佐賀市)

村田明久、『文久 2 年絵図』によるキリシタン墓地の立地分析、日本建築学会、2013.9.1、北海道大学(北海道札幌市)

村田明久、西彼杵半島におけるネリベイ

建物の技術的変遷について、日本建築学会九州支部、2012.3.4、西日本工業大学(福岡県京都郡苅田町)

[図書](計 2 件)

村田明久、ぎょうせい、居留地と都市基盤整備の近代化、新長崎市史、第三巻、2014、945 頁(pp.84-87)

村田明久、長崎市、練塀建築の配置・形式と変遷、長崎市外海の石積集落景観保存調査報告書、2013、340 頁(pp.251-266)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 明久(Murata, Akihisa)

長崎総合科学大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：4 0 1 1 3 2 5 3